水稲の初冬直まき実証

春作業減らし作付け拡大

【新いわて】八幡平市で水稲を生産する企業、かきのうえは作業の平準化による水稲の作付け拡大に取り組み、2020年から初冬直まき栽培を試験導入している。

岩手県八幡平市の企業

25年産の水稲の作付けは13㌶増の約50㌶を予定し、うち15㌶で初冬直まきを計画している。11月上旬から始めた初冬直まきは10㌶を終え、終盤を迎えている。

初冬直まきの作業の実演を見守る生産者ら（岩手県八幡平市で）

代表の立柳慎光さん（45）は「これまでの実証で初冬直まき栽培に手応えを感じた。25年産は作付面積の拡大に合わせ、前作の60㌶から大幅に面積を拡大した」と話す。

初冬直まきは、コーティングした水稲の種もみを降雪前に直播（ちょくは）し、春に出芽させる。春に集中する農作業を軽減し、労働力や設備投資を抑えながら規模拡大が可能な技術としても期待されている。

同社では、従業員1人とアルバイト1人を雇用し、立柳代表の妻と両親と合わせた計6人で、本年度は37㌶を作付け。育苗ハウスは10年前の就農当時のまま16㌶分の苗が作れる3棟だけだ。密苗やたん水直播などの組み合わせで面積を拡大してきた。

立柳さんは「初冬直まきは圃場（ほじょう）条件や天候に左右はされるが、春の乾田直播などでリカバリーも可能だ。作業分散による規模拡大につながっている」と手応えを話す。

同市認定農業者協議会は2日、同市で「稲作の作業分散のための直播技術講演会」を開き、市内外から約120人の生産者が参加した。岩手大学農学部で初冬直まきの研究を主導する下野裕之教授らが、初冬直まき技術について講演。立柳さんは直播栽培による作業分散の取り組みを発表し、播種作業を実演した。

日本農業新聞　令和６年１２月１２日（木）付／東北版
※この記事は日本農業新聞の許諾を得て転載しています。
※無断転載・複写を禁じます

©日本農業新聞　無断複製転載を禁じます。